

大城の方へ行きました。そうしたら、おじいさん、おばあさんたちは三日しか大城にいませんでしたよ、ときままして、垣花（玉城村）の新川の壕にいられますよ、といいましたので、小波津の方に、その新川の壕へ連れて行って貰いましたよ。それでこの壕で、子供たちもみんないっしょになりました。垣花へ行くまで一週間は別べつに歩いたわけです。

この新川の壕は大変に大きな壕で、穴の口が三つあって、野戦病院にもなっています。後には、怪我を受けた兵隊さんも、そこへ入って来ました。

そうしてこの新川の壕で家族といっしょに過ごしておりました。ところがこの壕も敵が来るといってみんな騒ぎましたので、またここから移動しようということになって、おじいさんたちは準備をして、移動の出發をやりはじめましたので、わたしは、子供を早く負んぶして、おくないようにしないと、またちりぢりばらばらになると思っていて、手早く子供を負んぶして、おじいさんや子供たちとはぐれないように、壕の入口まで来ました。そこで怪我をしました。左胸の肋骨のところは破片がつっ立ってしまったのです。それでほかのおじいさんたちが、手拭で被うて、その弾をつかんで抜き出してくれました。

この怪我は、だんだん大きく腐れて、ウジが出ましたが、九歳になる三男が、あちこちの壕をさがして、人が捨てて行った豚脂を見つけて来て、それと塩を交せてつけました。怪我しても薬とってはありませんからね。三男は、あちこちの壕をさがして、豚脂をさがして来ました。壕を逃げだす時に、脂は置き忘れたり捨て置いた

の壕については調査することができれば、紹介することができ。トドロキの壕の内部調査は不可能のようで、現状紹介よりほかはないだろう。

アメリカ兵が壕の入口へ来て、もしそこにいっまでもおるのなら、火を入れるぞ、弾も撃ち込むぞ、といったので、そうしたらその五、六日後に、大勢の人たちが突破するといつて、壕から出て行きました。大たい百人くらいの人が出たと思えます。

それで壕に残っていたのは、怪我をしていた兵隊さん十名くらいと、小波津の方が四名、それにわたしたち母子三人だけになりました。

それからどれくらい日経ってからであったか、よく憶えておりませんが、もうおじいさんやおばあさん、息子たちともちりぢりばらばらになっているから、自分たちの翁長の部落へ帰って、自分たちのお墓に入っていることにしようと思った。子供を二人つれて、こっち（胸）やられていきますから、子供は腰に結えつけてですね、大城まで行っていました。

小波津の人に、翁長の字まではとても行けない。今歩いて行く人はいないよ。行く途中で死ぬよ。わたしはも戻るから、さあ、元の壕に戻ろうと、この人たちに助けられて元の壕に引き返したわけですよ。それで二日野原の茅の中に、もぐっていました。その間は子供たちは、ひもじくさせて、何もくれるものはない。ここを出て翁長へ行くならしばらくで、道中で死ぬよ、と小波津の人にいわられて、いっしょにまた元の壕に戻ったわけですよ。そうして、この壕には、一月以上、長い間おりました。

りしたのがあったんですね。この脂と塩を交せてつけると、ウジも湧かずにすみましたが、それが切れるとすぐウジが湧きましたよ。この疵は、戦争が終って部落に帰るまで、ずっと脂と塩をつけてウジの湧くのをとめておりました。

それでもわたしは、みんなといっしょに脱出しようとしたら、おじいさんたちが、お前は怪我を受けておるから、この壕からどこへも行くな、戦争が終ったらここへ訪ねて来るから、といって止められて、家族はみんな出て行ってしまいました。わたしと九歳の三男と二歳の三女と三人が残されてしまいました。

おじいさんと一人のおばあさんや子供たちは移動しましたが、次男の一郎とおばあさんとは、この壕を移動しようとした時に、アメリカに捕虜取られました。

わたしは、疵は悪くなってウジも出ましたが、夜になると芋などをあさりに出かけて、食物を何とかかんとかして生きていました。水は壕の入口にありましたので夜になってから汲みに行きました。

註、この壕は何百人も入ってられる自然壕であつたらしい。

金武、普天間、それから、ひめゆりの女学生等のいた壕と似た地面から一旦下にさがってから横穴があって、上り下り、広狭、枝の壕などがある奥の知れない、沖繩中南部のあちこちにある壕と同類のものらしい。まだ調査していない。しかし、名城部落の座談会その他多くの座談会に出るトドロキの壕は、実地踏査した。すると、その壕の談者である当時十代の案内者は、いくら金をくれるといつても、今は入ることができませんといった。この新川

そうして暮しておりましたら、横穴の方から「お母さんよう」と叫びつづけながら、壕の中へわたしの次男の一郎がやって来ました。わたしたちは、この次男に助けられて生きることができたのですよ。

壕は前でもいいましたが、大変大きな壕でありますから、あちこちに蠟燭をつけておりました。わたしの次男は、この壕の横穴から「お母さんよう」と呼んで来ましたので、わたしは大きな声で「ハイ」とわかるように答えました。

「ああこんなに元気だったね」と、一郎の手を取って握りしめると、「お母さん、三人元気でしたね、作業場で、お母さんたちが、まだこの壕にいるときいたのでさがして来たんですよ、」といいました。こうしてわたくしたち母子が、あって喜んでいきます時に、前面の壕の穴口から敵が入って来ました。そこは、兵隊の品物、野戦病院でありましたから、電灯の光が見えた時には、敵だからと、怪我を受けている兵隊がいつも言つて、わたしたちに教えていましたよ。電灯が見える時には敵だから注意しなさいよおばあさんたちといいましたよ。

そうしたら、わたしの次男の一郎が「お母さんよう」と声をかけながら入って来るとほとんど同時に、偶然にも敵が来ましたので、その兵隊さんがいきましたよ。今、「お母さんよう」といって来たのが、敵をいっしょにつれて来ているといいましたね、しかしわたしの子供は横穴から来たのであります。敵はもう入口の方から来て、そこにあった怪我人の治療品を容れてある箱を取っては投げたりして、電灯が見えませんでしたよ。

そうしてわたしたちは後の方から出ましたら、垣花という部落に着いていましたよ。アメリカのその兵隊たちは弾も撃ちつづけておりましたよ。

壕の後から出ては来ましたが、九つになる三男は、泥だらけの壕で転んで着る物がなくて裸になっておりましたよ。わたしはまた、次男が来た時は、火を焚いて、着物をかわかしている時でありましたからね。その壕から出ると、もう今日は命は助かったといって、三男は裸ではありましたが、垣花部落に着きましたからね、垣花部落に、いつときははいて、またこの次男は、百名部落にひとまず着ていますからね。そこにつきましたら、そこで着る着物もない。敵が入り込んだので壕に着る着物も置いて、何も持たないで体だけすぐ後の穴から出ましたから、晩はまた壕に着物を取りに行きました。

わたくしは、兵隊さんたちは、敵にやられてみんな死んだだろうなあと思いましたが、その壕は、真中は道が通っていますが、坂になって、隠れるところがありましたので、兵隊さんたちは、みんな無事で、もと通りにおりました。

それでわたしたちが行きましたら兵隊さんが、今日は、「お母さんよう」と叫んで来たのが敵をつれて来たのだ、いっしょに来たのだ、といいましたから、わたしは、「わたしたちの子供は横穴から来ていますのでそんなことはありません。敵は、入口の前から来て電灯を照らしていたんです。電灯は前の入口から見えたのです」と、いいましたが、兵隊さんは、今日は許さない、といっていましたから、着物も取らないで親子で逃げて出ました。兵隊さんたちが

うことと、一人の子供が片方の目が無くなっているということを書きました、この若い方のおばあさんも、栄養失調になって亡くなつてしまったことがわかりました。

それで、子供たちがどうなったか、生きておるのか、死んでしまったのかわかりませんでした。

そうしておりましたら、調査しておる親戚が新聞を持って来て、子供たちが孤児院にいる、二人の名が出ている、生きていますよ、と教えてくれました。それで孤児院へ子供たちをつれに行きました。そうしたら、子供たちは、「わたしたちのお母さんは、島尻で弾に当たって怪我して亡くなった」といって、お母さんがつれに来ておる、といっても、しばらくは、母は死んでしまったと思ひ込んでいたので、本気にしなかつたそうでありました。

わたしたちの家族は十二名でありました。夫は、最初にお話ししましたが、北谷浜に敵が上陸した頃に、帰って来てわたしに家の壕を動かなく教えて、すぐ帰って行きましたが、それが最後の別れで、それからは見る機会はありませんでした。島尻の真栄平までは、いっしょだった、それから別べつになったという人がおりました。いっしょの防衛隊仲間は、全部亡くなって、ひとりも帰っては来ませんもの。どこで夫がどうして亡くなったか全然わかりません。ですから遺骨もさがすことができませんでした。

伊計島の教員をしておった長男も、あそこで現役兵に取られたままで、それっきりあうこともできませんでしたし、お父さんと同じく、どこでどういうふう死んだか全然わかりません。現役兵でしたから、前線の第一線で戦死したのでないかと思ったりしますが、

いいますのには、おばさんたちは命は助かっているがね、わたしたちは坂があつたから命が助かったのね、それはきつと、「お母さんよう」して来たのが敵をつれて来ているのだからと、ひどく怒つて言いましたよ。わたしは怪我は受けていなくても、殺すといひますよね、そうして兵隊さんたちは手榴弾を持っておりますから、今にも投げられるかと驚いて、また着物も何も持たないで、体だけ壕から逃げ出して来ましたよ。

そうして百名で家族五名が、暮しておりました。

次男とおばあさんがアメリカ兵に捕虜されて百名につれて来られた時だそうです。おばあさんは、すっかり驚いて正気を失って、いつの間にか逃げたおらなくなったそうです。それで、次男の一郎は、あちこちさがして、見つけてつれて来たそうです。

註、このおばあさんは、七十六歳、おじいさんの正妻、おじいさんは七十三歳で、二番目の妻が六十一歳のおばあさんで、新川の壕から子供たちもいっしょに脱出している。

おじいさんはですね、二番目のおばあさんもいっしょですが、女の子が目弾が当たって、目の玉が飛び出したので、それを見たらじいさんは、マーマアテーネービラン（正気を失いまして）逃げ出して、どこへ行かれたのか、摩文仁で見た人がいるということ、ちよつとききました、どこでどうして亡くなったんですか、そのまゝ帰っては来られませんでした。

大きい方のおばあさんは百名で、栄養失調で亡くなりました。

そうして、わたしたちも、福山の方へ移動させられました。それで、二番目のおばあさんが子供たちをつれて、福山へ来ていたとい

ほんとのことは少しもわかりません。

それでわたしたちは大人で子供五人と生き残って、上から六人が亡くなって、死んだのと生きたのが半はんになっています。

わたしの親の家は、沖繩におつた十人の家族が全滅しました。兄と、兄の長男は防衛隊に取られて亡くなりました。おばあさん、嫁が二人、お母さん、兄の三男、次女、三女、五女の十人が全部戦争のために、わずか二か月ばかりの間に亡くなりました。宮崎に学童疎開をしていた次男、長女、四女の三人は生き残りました。

わたしの弟は、防衛隊で生き残りましたが、家に残っていた妻子女族三人は全部戦争で亡くなりました。

わたしの怪我は、百名でかなりよくなりましたが、それは、九つにしかなくていない子供でしたが、あちこちの壕をさがして、豚脂の置き忘れたり捨ててあつたりしてあるものを拾って来て、塩と交ぜ合せてつけたから癒りました。しかしそれがなくなるとじきに疵が大きくなってウジが出ました。それがほんとに癒つたのはずっと後で、この翁長へ帰ってからです。

この九つになる子は、わたしは怪我で、出られませんが、芋なども畑へ行ってあさって持って来ました。

この子の生れたのは、アルゼンチンでしたから、あちちの名はベニーといっていました。日本名は国春です。十二歳の時にまたアルゼンチンへ行きました。

ほんとに戦争の話をやるのでありますと、二、三日がかりでゆっくり話さない、いろいろのことは話されません。

註、仲宗根ウトさん一家の戦争体験談は、本人が言われる通

り、くわしく話せばいろいろのことがあると思う。七十六歳のおばあさんの死ぬ時の状況を初め、百名での捕虜生活、また福山に移動してからも、ずいぶん苦しい体験があると思っただ、割愛することにした。

## 西原 善 栄（二十歳） 初年兵。現地召集

沖繩戦で恐らく二人としない形におかれておりますので、自分だけが戦争に当たったようなもので申し上げたいと申します。

わたしは三月一日（昭和二十年）首里に入隊した。球一八八三〇部隊に電信隊の六連隊、これは軍司令部の通信隊で、首里から津嘉山、与座、真栄平、タイラ、これだけが前哨になっていました。

宣撫班によって、屋嘉に行っています。なぜそういうかといいますが、大たい捕虜されるのが十一月の初め頃で、沖繩戦で最後の捕虜という形になっています。

六月二十三日頃軍司令部つきの参謀少佐によって、その時参謀少佐が戦死されて、その軍刀は壕にあった筈ですが見つかりませんでした（ギーザバンタ）。

沖繩戦の戦記なんか見ておりますが、戦記の最後が、われわれの部隊、向井隊、通信隊ということで書かれてないようで、このわれわれの戦闘は漏れていると思います。

その時は、向井隊は全員通信隊でもんですから、ほとんど海岸まで残っていたんです。海岸に下ったら、そこには残留部隊が相当に密集していたんです。そうした場合に、君等の隊長は何か、階級は何

かというので、中尉です、と言ったら、今度は、わしらも連れて行け、というのです。それで二百名ばかり連れて行ってですね、最後の総攻撃です。二十四日頃でないかと思いますが、たしかに摩文仁は随ちていたでしょう。その翌日あたりです。それが沖繩戦の最後は向井隊であるかと記憶しています。戦記を見るとそうではないのですね。二百名ばかりの残留部隊が向井隊に合流したわけです。

向井隊はこれまで通信隊で通信ばかりしていて、一度も戦闘には行ってないもんだから、鉢巻をしめて元気なもんですよ。だがその合流した部隊が、戦争をして来ているから、敵の砲火に立ち向かって結局はただ全滅するだけだということであつたのでしよう、ただ台上へ上っただけでした。後は、向井隊が前進して、（ほとんど）全滅です。通信隊ですから手榴弾だけで、全員戦争の経験がないものばかりですから突進して全滅したのです。

とに角、台上に登る前に、三つの約束があるのです。一つは、切り込みをやって、第一線を突破したら、津嘉山の四号道路に集まって、後は集まっただけで敵の弾薬倉庫などを破壊する。それが一つです。つぎは、その時は指揮官は古橋中尉ですから、夜間は目がよく見えないから号令でついて来る。そのつぎは、もし怪我をした場合には、行けないから、銃剣で刺すか、もしくは軍刀で切る。そういう三つの約束をもって、ギーザバンタから上へ上ったわけです。上ったら通信隊だけは、ドンドン進んでいる。古橋中尉は抜刀してやっています。通信隊だけはドンドン進んでいるのです。

通信隊ははじめてだもんですから元気いっぱい、僕なんか怪我していたから三角巾で巻いていましたが（頭の右側、耳、目、現在右

眼は視力ないそうである）一斉に進む。後の残留部隊は、もう戦争は終わったんだからといって、前進しない。

わたしは古橋中尉の当番でしたから中尉の後にいたわけです。そうしたら、その時にわたしは中尉に軍刀でやられたですね。上から打ち下されて、もう僕は、後はわからないです。今から考えると多分ミネ打ちだったと思います。別に疵もないし、血も出ていません。

古橋中尉が切ったとしても仕方ありません。約束が約束でしたから。僕は疵受けて、僕の側を見ると進まなかったの、僕も動かなかったんです。それは約束だから一刀のもとにやられました。それは僕一人だけです。僕は当番でしたから、中尉の後にいたわけです。

僕はどれくらい気を失っていたか、それはわからないが、それから海岸下って、海岸下ってからが大変ですよ。海岸下ったら、もう全部占領されておるから上には上れない。上に上がることができなければ食糧はさがすことができない。海岸には食糧は何にもないのです。約十五日から二十日くらいの間、断食ですよ。海岸では、何もありません。食べるものは、ただ阿檀の実をさがしてですね、それをおかじっただけです。

下ってからは食糧難が第一ですな。もうめいめいになって、グルーブもあります。六月二十三日後ですから、大たい七月の初め頃からももうようやく道から次第に歩けるようになっていっています。

それで、海岸へ下って約二十日くらいは、台地で銃を構えて待っていますから上れないわけです。入口は、ところどころに道はあるの

ですが。そうすると、崖の中間、アメリカ兵がいない断崖を突破しなければならぬんですよ。その断崖を上った気持は、いつでも忘れられないんですよ。軍靴をはいていても、断崖は直立ですからね、上って半分したら、もう駄目だから、引き返そうと思つたんです、二人。今度はもう足がどうしても引き返しはできないわけです。こういう場合、上へ上るより仕方がないんです。何といいますが、死ぬより悪いような妙な気持だったですね。やはりあの断崖の突破は、もう下には下れないわけです。うちは下ろうと思つたんですが、どうしても足が下れないわけで、断崖がまっすぐ立っていますから。そこはギーザバンタですが、摩文仁の断崖。道のあるところは何でもありませんが、そこは駄目です。アメリカさんが構えているから。

註、ギーザバンタの断崖を現在単身で上り切ることとは不可能である。当時そこまで追い詰められた歩兵だった案内の人から、どう見ても行くことができると思われぬ断崖の中間、ちよつと突き出たところに、兵隊が二人死んでいた。そこへ行くことは出来ないと思うし、爆風で吹っ飛ばされて持って行かれたのか、といったことを話した。ギーザバンタについては、大勢の人の記録に出るので、他でくわしく説明されるだろう。

それから与座へ行つて、仲座ですね、仲座へ行つて、そこでも大分心配して、苦労したんです。まあ夜が明けて来たら、どこに隠れるかな、と考えたら、向こうに製糖工場の煙突がありますよ、煉瓦の。向こうに隠れようと、日が上っているから、その中に入っていたわけです。そうしたらそこに靴があるんですよ。それで、こ

れはやられている証拠だからこっちは駄目だと、咄嗟に考えたのが、瓦葺の家が一軒あったわけですが、道路わきに。それは与座ですが、咄嗟に考えたら、天井に隠れたら大変だから、簡単どころに居ようと急に思いついて、タンクに飛び込んだわけです。水のない水タンクに。そうしたら運悪く、雨が降ったんです。昼頃、にわか雨が降ったもんだから。当時アメリカさんは道路工事やっています。そうしたら天井に向けてパンパンやっていたんです。もうその時の気持は何ともいわれなかったですよ。それからまた、だめだからといって、海岸へ行こうということで、海岸へ行ったら、そこはまた大変ですよ。一列横隊に並んで、全部掃蕩戦ですよ、一列に並んで。それで隠れ場は無いわけですね、岩ですから、だから岩の裂け目を利用して、隠れたわけです。そうして昼になったら、あっちでもやられた、こっちでもやられたと悲鳴をあげるわけですね。

それで翌日になって、急に考えたわけです。それは、隠れている岩がずらりと並んで立っているようですから、それでこっちら大丈夫だろうと上へ上ったわけですよ。岩の Teppen にですよ。アメリカさんは下をやるから、上へ上ったのです。上ったらこれがまた何です。成る程、下は安全だったんですよ。今度はまたグラマンがですね、いたずらやるわけです。拳銃でいたずらやろうと撃つんですね。

そんなこんな岩に隠れていて、八月になったです。それで食事は大変だったんです。大抵四名、五名がグループで、ギーザバンタから八重瀬の方へ食糧さがしに行きおったです（ギーザバンタ、八重瀬）。突破の準備にあさって来たわけですが、その芋は、ちょうど鉛筆みたいで、鉛筆と同じ大きさです。そういう芋を持って突破しようとしたんです。その時は六名のグループでした。

そうして突破したら、岩かげから電話線がいっぱいつながっているんです。アメリカさんがいるから注意しなさいよ、と六名連絡しているんですよ。そうしたら、ちようど岩かげに待っていたわけですよ、敵は。機関銃で待っているから、前に飛び出た三名はすぐその場でやられたわけです。相手は内がわから見ていたわけですね、やられて、自分の前には上等兵だったですがね、胸をやられて、下へ転がったわけです。そうするともう下へ転落する以外にないから下に流れましたよ。見たらこういふんですよ、この上等兵が、信管抜いてくれ、もう自分は駄目だからということで、信管を抜いてやっただけです。そうしたら、死ぬには死ぬが、あの芋だけは食べてから死にたい、それくらい、食うことには困っておったのですよ。ちようど鉛筆くらいの芋ですよ、煮てもない生まの芋です。それを食べてからやるんだ、というんですね、死ぬ人でも腹を充たしてからというくらい大変食糧難だった。

それから八重瀬岳に行って、八重瀬岳でもこういう場面があったですね。八重瀬へ行ったから食糧の心配はないが、アメリカさんが心配ですね、掃蕩作戦が。そうした場合に人間の生きる力というのを見たわけです。

アメリカさんは、ちようど五時になったら大体、何も撃たんで帰ろうとする、これを自分たちは知っているもんだから、弾が止んだら出ていいんだということで、岩陰から上った。自分たちも、もう

重瀬間の距離は約四キロメートル。もう八月になって、部隊は解散していますから、八重瀬に行って食糧を取って来たら、待ち構えていて、殺して食糧を奪い取る兵隊もいたので、一人の行動は絶対許されない、食糧には大変苦労しましたよ。アメリカの雑話や携帯食糧を死んでいる人が抱いて持っているの、それを取って来て食べる時の気持も何とも言われませんでしたね。

アメリカさんは衛生を重んじていますから、全部艦砲穴に埋めてあるわけです（食べ残したものの意味だと思ふ）。一つの穴をさがしたら、四百個も五百個も出るわけです。これをさがしに、また大変なこともあうわけです。土が盛り上っているのは、全部が全部雑話というわけではありません。アメリカは、当時、捕虜から狩り出して、死体の埋葬をさせていたんですね、捕虜民を使って。それで、雑話あさりに行つて、それにぶつかって掘り当てるときは、実に妙な気持ちになりましたね、この気持も何ともいえない、いやで変なものでした。

海岸に行った場合、他府県出身の生き残った兵隊がさがしているのは、沖縄人ですよ。大体四、五名一組ですが、他府県出身の人たちは、沖縄県人を奪い合うのです。沖縄のものは地理がわかつているし、いっしょになって北部へ突破するために。

そうして、ギーザバンタの台上の線です、向こうは第一線ですからバリケードを張って、待っているんです、また引返して、また上って、また引返して、突破はできません。

当時、七月の初め頃十五日以上も断食して何もなかった時、突破する前に、芋をあさって来たわけです。まず芋を持たないといかん

五時だから大丈夫と出ると、相手がいた。「平」という大島（奄美）出身の上等兵だが、二人がぶつかっていたわけですよ。その上等兵は、僕を敵だ思ったもんですから、もう、うしろも見ないでまっすぐ駆け出したわけです。八重瀬から下まで一里（四キロメートル）以上ありますよ。彼は振り向きもしないで、一直線、まっしぐら、谷もあり川もあり崖もあるが、まったく死物狂いに、力のある限り駆け行きます。振り返りもしないので呼び止めるわけにもいかない、上の方には敵がいるのだから。人の力量ははかり知れないものだと思いますよ。この上等兵は元気で大島にいますよ。

それとですね、よく言われる、何といえますか、なにかに出る有るか無いかということの印象ですがね、自分たちは八重瀬の門中墓の炊事場に残っていたんです。グループは六名でしたが一人は当番で五名は食糧とかいろんなものをさがしに行くんですが、この五名が食糧を取りに行っていない夜ですね、その場合に妙なことが起ったんです、そこで。戦争中、向こうは門中墓ですから、瓶を庭へ出してずっと並べてあるんです。そうすると一人残って炊事をやる。

（門中墓も壕につかった）この炊事の当番が炊事もすんでから、その墓の中に眠ようと思つても、その中にどうしても置かないんですよ、眠ようと思つてもどうしても、そこでは眠れないですね。その代り、出している骨瓶のそばや、骨瓶と骨瓶の間なら眠れるんです。それは六名の者全部が経験したことで、どうも不思議に感じているわけ。戦後そっちはどうしても行つて見ようと思つているが、まだ行つたことがない。それはもう誰も気にしていないが、また安全ということもわかっているんですよ、六名とも、わかっているが、

みんな同じ気持ちだった。

それから安心したということですが、もう一番安心した、安心感というのは向こうにおつた時ですね、ギーザの海岸です。まあ、半年以上、こうして戦争をやっていたのですが、自分は怪我しておるか、仲間がひとり加わったわけですが、戦友が。そうしたらその戦友が、あしたになったら死ぬから、今日で出よう、捕虜になるうというのです。それで、僕は怪我しておるから出ない、君一人出なさい、という問答しているわけですから。そうしたら相手は捕えられる考えですから、今元気でよ嘉手納ですが、嘉手納の人ですから。立ったり坐ったり、立ったり坐ったり、わざと見られるようにするんですよアメリカさんに。さあ、出ようよ二人、といったがわたしは、怪我しているからどうしても出ないよ、君だけ出なさいよという、彼は、あしたは必ず撃たれるよ、戦死するよ、そう言い争ってですね、出したわけ。出すのは海上戦車が帰る捕虜人をついて乗せて、渚から百メートルくらいのところを浮いていたんです。それでこの海上戦車が帰る頃になったら、彼は、もう帰るからあしたになったらやられるよとそういってから、その海上戦車へ向かって、オーイ、オーイ手をあげて呼んだんです。そうして捕虜に取られたわけ、二人。捕虜とられることになったら、その時はじめて、ああ、二人とも助かった、という安心した気持ちになったんです。助かったという安心感といいますかね、それは何ともいえないものだったんです。軍服をつけたままだったんです。

戦後は何ですね、戦後の遺骨拾取(蒐集)ですね。この点では僕なんかも何百柱拾ってあげたかわからないですね。そのために生き

けしかここへ参拜に来てない、こう考えたわけですよ。

そういいますのは、新聞に古橋中尉の行方を知った人はいないかとあつたわけです。わたしは自分等の隊長で当番兵だったから、新聞を見たから訪ねたわけです。

この人は古橋中尉の叔父に当る人で、鬼頭銀三というのですが、この人も自分の顔を立てるため、自分の名を売るためだということを感じました。

それは、古橋中尉の慰霊碑を建てるということですが、君たち初年兵が生き残っているのだから、それは、君たちが建立すべきだというですよ。やるべきというところは間違っているわけですよ。自分の甥に当る古橋中尉の碑を建ててくれという鬼頭さんの気持ちはわかるんですが、わたしは当時の初年兵十一名を集めて、鬼頭さんのところで話したんですが、個人中心には、やらない。向井隊、向井隊長をはじめ戦没隊員全体、向井隊の慰霊碑なら建立していい。それには、浦添前田までは、全員かたまつて行動したのだから、場所も前田を選んで立てるならやるといのが、われわれ初年兵生き残りの考えです。

この慰霊碑は、まだ実現しませんが、毎年われわれは集まって、六月には戦友の冥福を祈っています。

それからわたしの家、家族のことを述べますと、父は防衛隊でアメリカの上陸よりずっと前に召集されましたし、わたしは話しましたように初年兵現役召集でありましたので、残りの家族は、母と、わたしの弟妹が五名、祖父母と八人がいたわけです。当時父

たようなもんですよ、そこまで。

うちの親戚だけでも十三戸が全滅ですから、当時は部落に男はいなかったわけですよ(十八名だったですね、海外から引き上げて来てから男も多くなつたー城間清茂さん発言)。

その当時は、遺骨の拾取がまた大変だったんですよ。遺骨を拾って、洗って、墓をあげて葬って、毎日がこの仕事です。一番印象に残っているのは、自分の親戚で、水たまりに葬ってあつたのを拾取したことですよ。水たまりの水の中ですから腐らないわけですね。

ミールではないが、腐敗はしているが、それが散る力がないわけですね、大変だったですよ。場所は鳥尻の武富でしたが、シャベルで当って見たら、水がいっぱい溜って、ずっと当って見たらこっちに三名葬つてあつたんですが、手を入れて見たら、そうして動かしたら三名が浮び上つて来たわけです。ちよつとびっくりしたですね、三名ですから、一人ひとり、まるでミールみたいなのに、男は僕一人であとは女ばかりですから、自分一人でやる以外にない、動かしたらそのままの肉体ですからね、しかも三名ですからね、そのまま肉がくっついているので、その時は何ともいえません。埋めたころは、わかっていました。

遺骨は何百柱と拾つたと思うんです。それで自分の戦友なり知っているだけは、ほとんど拾って上げておきます。自分の上官の遺骨も拾つたですよ。例えば、古橋中尉、まあ七月頃だったと思うんですが、テレビで放送されたわけですよ。あの方と自分の班長の遺骨収拾をしたですよ。あの時に感じたことは、他府県の人たちの考え方をわたしに言わして貰つたら、相手は自分の顔を立てるためにだ

が四十歳くらい母は三十七か八歳くらいだったと思います。祖父母と申ししてもまだ六十前の五十代だったのです。

それで部落内で捨てられた、残された人の立場になって、話して見たいと思います。

わたしの家の場合も、「お前たちをつれに来るよ」といってお母さんも子供たち五人も捨てられたわけですよ。

それでお母さんのお父さん、わたしのおじいさんは、孫たちとは最後までいっしょである、そんな人はわたしのおじいさんのほかにはいないんです。このお爺さんが、今の弟たちを守ってくれたわけです。その点について人間の気持が左右されると思います。

お母さんは翁長で戦死して捨てられ、あちこち隠れる時に末っ子と二人やられているわけです。おじいさんも壕で、手榴弾を放り込まれたので、孫だちを抱いて、自分だけが弾に当って、子供たちを助けたという弟たちの話です。そうして四名は助っています。お爺さんが守ってくれなかったら、どうなっていたかわかりません。この四名はみんな大きくなって、家を持っています。

さつきからいっていますが、戦争はまだ終ってないと思うんです。それは、終戦当時、二十から嫁をさがし所帯を持ってですね、で、これたちをまあ、一人前にしておのおの分家させています。二十五年前の方、子持ちという形ですよ。父母がわりに来たわけです。

いまだに、おじいさんのことは、どうしても忘れません。他の親戚が捨てて行つたんですが、お爺さんだけは最後まで孫たちといっ

しよだといつてずっと踏み止ったんです。

四人の弟たちは、孤児院にいたのをわたしが屋嘉から来てから孤児院から引き取りました。

お父さんは防衛隊でしたから、どこで亡くなったかもわかりません。

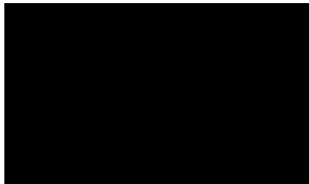
註、おばあさんも亡くなって、十人家族の中、父母、祖父母、末弟の五名が犠牲になっている。ちようど生死半分半分である。

### 我 謝 (西原村)

宮 城 聡

時 一九六九年十一月十九日  
場 所 城間賀栄氏宅

氏 名	現 住 所
平良幸市	
宮平政子	
宮平かまど	
新垣キク	
城間勝弘	
小橋川要好	
呉屋嘉真	
城間賀栄	



### 解 説

我謝部落は、十三号線からちよつと西がわへ入った与那原町に接する、西原村の南西の端しに位置している。沖縄市町村要覧によると、一九六五年の国勢調査の人口は九九六人だが一九六八年の住民登録人口は一、六六七名に急増している。世帯数も三三三戸、西原村では群を抜いて多い。

ところが終戦ちようど二年後の四七年八月三十一日の人口は六百

九十人であった。その頃には外地からも帰って来たので、終戦直後の四百五十人に較べるとかなり殖えている。

それでは、戦前の人口、戸数はどれくらいだったか。座談会での話しでは百九十七戸とのこと、これは、当時、調査しているもので違っていても大差はない信憑性のあるものと思った。戦争直前の戸数、人口は、出席者のほとんどがよくわかっているようであった。

その時の人口は約千人で、余っても足りなくても十名を越さないようであった。そうして一家全滅が四十戸、一人残った家が二十戸総犠牲人員が約五百五十名、生存者四百五十名と記録されているようである。

この座談会出席者の話でも、我謝の犠牲の多かったことがよくわかる。宮平政子さんの家は、父母、弟妹四人が一家全滅しているが、船越での爆弾で酷い負傷を受けた時、同じ我謝部落の前久手堅マツケン小という家の七人ばかりの家族も全滅したことを語っていられる。またお母さんの実家、おばあさんの家は、宮平さんのいとこ一人だけ残って四人は、一度に直撃で、亡くなった。宮平さん自身の方も、主人と二人の子供のうち一人が戦争のために亡くなり、生きている方、死んでいる方が半々である。

現区長の呉屋さんは、九人家族の中、二人だけ生き残って、七人が戦争のために犠牲になっている。

立法院議員の平良さんも、お嬢さん二人、お母さん、弟さん、姪一人、伯叔父さん二人、その配偶者、伯叔母さん三人、各おの配偶者、お話から見ても、三親統内近親が、ご本人を合して十八人だ